

『ハングルの誕生』

野間秀樹[著], 2010年, 平凡社。(=김진아외역, 2011, 『한글의 탄생』돌베개.)

[評者]

金智英

KIM Jiyoung

2011年10月から同年12月まで韓国sbsでテレビドラマ『根の深い木 —世宗大王の誓い』が放送された。その後2014年から日本のフジテレビ、bs朝日、テレビ東京などで放送された同ドラマは、15世紀の朝鮮王朝4代王として知られる世宗大王が尽力したハングル創始の裏に隠された秘密を明かす歴史ミステリーである。このドラマは韓国では視聴率24%を超えるほどの人気を博し、2012年「百想芸術大賞」テレビ部門大賞を受賞した。さらに、このドラマで主人公を演じた俳優ハンソクキュは2011年sbs演技大賞を受賞した。ドラマに対する人々の関心が高まると同時に、ハングルに対する関心も高まる効果を得た。

韓国においてこうしたハングルに対する関心が高まりつつある時期に、同じく注目を浴びたのが野間秀樹の『ハングルの誕生』である。この著作は、日本では2010年5月に平凡社から『ハングルの誕生——音から文字を創る』というタイトルで刊行されたが、韓国ではそれより一年遅い2011年10月に『ハングルの誕生——〈文字〉という奇跡』というタイトルで翻訳出版された。すでに2010年度のアジア太平洋賞を受賞し、広く認知されている本であり、日本人によるハングル研究書という点で、韓国人にとっても非常に重要な意義を持つものであった。本書に接した韓国の大半の読者は、野間秀樹という日本人の名前をみて驚き、疑懼の念をいだくかもしれない。しかし、読み進めてみれば分かるが、この本の論述の範囲は、歴史や文化を視野に取めると同時に言語学、記号論、音声学など多岐に渡る学問領域に裏打ちされたものであり、ここに費やされた多大な作業と労力は読者を脱帽させる。『ハングルの誕生』は、そのタイトルから想像される以上の内容的な広がりを持ち、狭義の韓国語研究の枠を超えて、文字、言語とは何かという問題までも視野に収め、言語学という学問領域の魅力が伝わる本である。

もちろん日本の言語学者が日本人の読者を対象に著述したため、多くのところで日本語との対比や比較分析などを行いつつ内容が展開されるので、日本語を知らない韓国の読者が読むには難解なところがあると思われる。

ただし、著者である野間秀樹がハングル版のために加筆や修正を行った部分も多く、また、詳細な注釈が付いているので、韓国の読者であっても内容に理解が及ばないことはない。

『ハングルの誕生』は、ハングル創始にあたって15世紀の朝鮮王朝の第4代の王世宗が公布した『訓民正音』を現代の言語学の観点から読み解こうと試みている。しかし、本書は「ハングル」だけを語る本ではない。ハングル創始以前からあった数千年間の文字活動に関する歴史的背景などを詳細に説明し、世宗と当時の学者たちが言語に対してどれだけの分析力と創造力を発揮して、新しい文字を創り上げたのかを歴史的、言語学的に解き明かしていくのである。

まず注目を引くのは第1章である。第1章では、ハングルの名称と、言語および文字の概念を丁寧に説明し、ハングルという文字が持つ体系的な独自性について説明している。その中でも特に注意を引くのは、インドネシアの少数民族が使うチアチア語の表記手段としてハングルが公式に採択されたという指摘である。ハングルという文字は韓国語のみならず、日本語や英語を含む多様な言語を表記することができることとされる。

第2章にも注目すべき論点がある。ここでは、韓国語という言語の特徴が日本語との対比で語られる。ハングル創始以前まで、朝鮮半島での表記手段は漢字だけだったことはよく知られている。この点に関して本章では、漢字だけを使用していた韓国と、平仮名と片仮名を使用していた日本において、自国の固有の発音体系をなんとか漢文に重ねようとして考案されたさまざまな方法が紹介されている。その中でも興味深いのは、「口訣」は、万葉仮名のように漢字を借りた表記法であるが、この「口訣」以外に古代の朝鮮半島では、漢字で韓国語を表記する表記法として、「吏讀」、「郷札」、「借字標記法」などが存在したという事実である。またそこでの分析は、ハングルが誕生した背景のみならず、言語と文字がどのような関係にあるかを読者に考えさせる点で興味深いともいえよう。さらに著者は、紀元前20世紀にシリア・パレスチナ地方に住んでいたセム族によって発明されたアルファベットが、中国大陆に至るまでの二つの経路を「アルファベットロード」と言い、そこから韓国が受けた影響についての考察を通じて、ハングルが世界の文字史的にどのような位置に立っているかを俯瞰的な視野で説明している。

第4章からは、中心的問題であるハングル誕生の歴史的な背景が語られる。特にハングル創始の過程を過去の出来事としてではなく、本書を読んでいる我々読者ととともにハングルの創っていくような同時進行的な構成で、世宗とハングル創始の反対派との葛藤がドラマチックに描かれている。ハングルが文字体系として誕生するまでの過程で、その「文字を創る」とい

うこと自体が、当時の常識では疑問の対象であった。その理由は、新しい文字を創るということは、新しい文化を創り出す試みと同義であると同時に、当時絶対視されていた中華世界からの文化的自立の試みをも意味するものであったからである。当時、王朝を代表する知識人であったチェマンリが世宗に申し立てたハングル創始に反対する有名な上疏が持つ意義と、これに対する世宗の反論を叙述したところは、本書のハイライトであると言える。

第6章からは、ハングルが単なる文字体系としての機能にとどまらず、既存の「知」のあり方をも揺さぶるものであることが印象深く書かれている。また、なぜ韓国で独自の金属活字印刷技術が発達したかが説明され、さらには筆と紙を通じて作られた韓国の書道など、具体的な表現手段の次元をも視野に収めたハングルの研究が行われている。最終章では、ハングルという独特な文字の発展と完成、またコンピュータによる言語処理とハングルの親和性の理由について語られている。

『ハングルの誕生』は、「話された言葉」だけで存在した朝鮮語から、「書かれた言葉」として創り出されたハングルを、現代言語学の観点から詳細に検証した本である。形のない言語というものに、文字という形を与えることは、文化的重大事であった。著者はその出来事を「エクリチュール革命」と呼び、さらには新しい美を創り出す「ゲシュタルトの革命」と呼んでいる。

決して平易とは言い難い内容の書であるが、野間秀樹は軽妙な語り口で論を展開している。ハングルの基礎の紹介から言語と文字の関係に至るまでを、真摯に解きほぐしていく論述は、一方で、韓国の読者には韓国語とハングルについての考察を促し、他方で、日本の読者には日本語の世界を再考させる。ハングルの創始の原理と背景を、膨大な知識と優れた考察力で解説していくこの本は、日本の言語学者が書いたハングル研究書であることを忘れさせる。ところで、この本は日本と韓国にまつわる歴史や民族問題に関しては一切触れてはいない。著者は、民族主義的な政治課題にとどまることなく、「知」をめぐるより包括的な次元に光を当てている。西谷修が「このような幸福感に満ちた本を書きえたということは、どんな分断も対立も超えて行き交える知の営みによる、東アジアの相互理解への掛け値なしの貢献だ」（韓国語版巻末書評より）と述べたように、『ハングルの誕生』は「知」の観点からハングルに焦点を当てた創見にみちたプロジェクトであるといえよう。